

問題はつぎのページから始まります。

一

次の各問いに答えなさい。

問一 次の各文の——線部のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

- 1 学校が指定するセイフクを着用する。
- 2 先生が漢字小テストのプリントをハイフする。
- 3 兼好ホウシが『徒然草』の作者であると学ぶ。
- 4 水生植物がグンセイしている。
- 5 彼はこの会社の功労者だ。
- 6 この日がまさに人生の分岐点だった。
- 7 体調が良くないので滋養のある食べ物を口にする。
- 8 修学旅行に常備薬を持っていく。

問二 次の() の読みをそれぞれ漢字で答えなさい。

- 1 判断を(あやま)ってしまった。
- 2 (あやま)って仲直りをする。
- 3 成功を(おさ)めた。
- 4 税金を(おさ)めた。
- 5 (あたた)かい日差しが心地よい。
- 6 (あたた)かいお茶を飲む。

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

筆者が担当する日本人学生向けの「日本語の文法」という授業では、「日本語は難しい」というコメントを書いてくる学生が常にいる。外国人日本語学習者が言うならまだしも、日本語母語話者もそういうコメントを口にしがちである。

実は、自分の母語を難しいと考える人が社会にいることは珍しいことではない。筆者は「中国語が世界一難しい」と言う中国人を何人も知っているし、「イタリア語が一番難しい」と言うイタリア人とおしゃべりしたこともある。人は自分の母語を自然に習得してしまうため、その言語構造を説明することができない。

読者のみなさんは、「助詞の「に」と「で」ではどう違いますか？」と聞かれてさっと答えられるだろうか。「に」と「で」くらいなら、関連書籍をちよつと読めばすぐわかるのだが、「は」と「が」になるとちよつと手ごわくなる。日本語教師は別として、一般の人は答えに苦しむこともあるだろう。これが、^A「母語は難しい」ゆえんである。

ところが、日本語の場合は、島国であるという環境も相まって、日本語や日本文化の特殊性を根拠に、日本語の難しさを主張する人がいる。日本語の特殊性とはなんだろうか。ある特徴が日本語だけにあるとすれば、それは日本語の特殊性と言ってもいいだろう。それなら、日本語の特徴を少し考えてみたい。以下のような点が代表的なものだ。

- ・ 語順がSOV型（主語 目的語 動詞） （例）私^Sが^Oごはんを^V食べる
- ・ 名詞に助詞がつく （例）私^Sが^Oごはん^Vを^V
- ・ 敬語がある （例）食べる←「いただく／めしあがる」に変更できる

戦国時代にイエズス会の宣教師として活躍したジョアン・ロドリゲスも、これらの3点などを日本語の特徴としてあげている（『日本語小文典』）。

ロドリゲスは宣教師の意見を各大名に伝えるべく陳情活動をしており、日本語が相当できたと言われている。よって日本語に関する洞察は深い。

だが、言語学者の金田一春彦氏のベストセラー『日本語』によれば、世界の言語を見渡してみると、日本語だけが持っている文法的性質はないと

いう。先に述べた語順、助詞、敬語などの特徴は、世界の多くの言語と共有するような普遍的なものである。特に語順に関しては、さまざまな調査からSOVがSVOよりも多いことがわかっている（言語学者の角田大作氏の書籍などは参考になる）。つまり日本語の語順はありふれたものなのだ。それをもって日本語が難しいとは言えない。

文法的には日本語の特殊性はないことを紹介した。漢字や音訓読みなど文字に関する特殊性は一旦横に置いておこう。ここでは音声言語としての日本語を想定する。文法的な特殊性はないのだが、日本語には特殊な点もあるという。

金田一氏が強調するのは、日本語ほど国籍と使用者が一致する言語は珍しいのではないか、という点である。つまり、「日本語Ⅱ日本国の言語Ⅱ日本人」の構図が成立するというのだ。日本語は日本国内でどこでも通じる一方、海外では通じない。これは特殊な状況であるということを、金田一氏は様々な文献をひきながら論じている。

確かに日本国外で日本語が広く通じる国はない一方で、日本国内ではどこでもだいたい日本語が通じる。「大泉町（ブラジル人集住地域）はポルトガル語があふれているぞ」とか、「ハワイは日本語が通じるぞ」などという反論があるだろうが、あくまで他の言語と比べたうえでの議論である。多くの言語はこんなに国境と話者が一致しないというのが趣旨である。ここで表明されている国境と日本国籍と日本語使用者が一致するという考え方を本書では「日本語Ⅱ日本人語仮説」と呼びたい。

日本語Ⅱ日本人語仮説は、日本人は均質であるという発想と結びつきやすい。国内に日本語を話す同質の人間がいて、国外には日本人とは異質な人間がいるという考えである。

確かに、アイヌや琉球、在日の多様性を認めたくなくても、^①相対的に見て日本人が均質であるという点は多くの識者が指摘しているところである。商慣行における日本人の同質性を指摘する外国のビジネスマンも多い。また、ガッツポーズをした外国人力士が批判されたり、刺青の外国人観光客がお風呂から素っ裸で追い出されたりというニュースに触れるたびに、我々の社会に存在する暗黙のルールを考えることになる。そして、我々と彼らを線引きするラインが浮き彫りになる。

ちよつと変わった職業人に登場ただこう。吉本興業のオーストラリア人漫才師チャド・マレーンさんは、お笑いの一ジャンル「あるあるネタ」が存在するのは、聞き手が同質であるからだと言っている。「あるあるネタ」とは、聴衆の共通経験としてよくある話をとっかかりに笑いにつなげるもので、「そういうこと、あるある！」と思わせないと話が進まない。ちなみに、海外では笑わせる相手の人種や社会階層ごとにネタが違っても

述べている。アメリカでは黒人やユダヤ人といった^③タイショウウごと^③に笑いを提供する形の人もいるとのこと。ターゲットがサイブン化されている^④だ。

金田一氏の指摘からもう30年以上も経^たつ。時代は変わったとも言える。I、多くの日本人は、生まれてから死ぬまで、日本語母語話者以外と話す機会は非常に少ない。II、日本における在住外国人の割合は、総人口の2%程度だからである。III、その多くは、「在日コリアン」と言われる日本語ペラペラのアジア人である。IV、外国人と触れ合う場面はこれまで非常に少なかった。日本語II日本人語仮説はまだまだ健在なのではないだろうか。

(岩田一成『やさしい日本語ってなんだろう』)

- *1 陳情……実情を役所や政治家などにうったえて、なんとかしてもらおうようお願いすること
- *2 趣旨……あることをするにあたっての、基本的な目的や理由
- *3 均質……ものの、どの部分をとってみても、むらがなく、同じ性質や状態であること

問一 —— 線部①～④のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

問二 本文中 I IV にあてはまる語句として適切なものを次のア～オから選んで記号で答えなさい。

ア なぜなら イ なので ウ もし エ ただ オ しかも

問三 —— 線部A 「『母語は難しい』ゆえん」とあります。「ゆえん」とは、ここでは理由や訳わけという意味になります。では、その「『母語は難しい』ゆえん」とは何か。そのことが述べられている個所を本文中から一文でぬき出して、その最初の五字を答えなさい。

問四 —— 線部B 「イエズス会の宣教師」とありますが、一五九四年に鹿児島に渡来し、日本で布教活動を行ったイエズス会の宣教師は誰ですか。次のア～エから一つ選んで記号で答えなさい。

ア バスコ・ダ・ガマ イ ペリー ウ コロンブス エ フランシスコ・ザビエル

問五 —— 線部C「これらの3点」とありますが、3点とは何ですか。それぞれ本文中から漢字二字でぬき出して答えなさい。

問六 —— 線部D「日本語の語順はありふれたものなのだ」とありますが、日本語の語順とは次のうちどれですか。最も適切なものを一つ選んで記号で答えなさい。

- ア 主語 + 動詞 + 目的語
- イ 主語 + 目的語 + 動詞
- ウ 動詞 + 主語 + 目的語
- エ 動詞 + 目的語 + 主語

問七 —— 線部E「我々の社会に存在する暗黙あんもくのルール」とありますが、本文中で述べられている「暗黙のルール」の具体例として適切でないものを次のア～エから一つ選んで記号で答えなさい。

- ア 大相撲で対戦相手に勝った力士が勝ち誇ほこってガッツポーズをすることは、相手に対して失礼なのでしてはいけない。
- イ 公共の場では刺青などは人目につかないようにしなければならぬため、公衆浴場には入ることができない。
- ウ アイヌや琉球、在日の人々、外国出身の人々がお笑いなどの伝統的な仕事につくことを認めなければならぬ。
- エ ビジネスの場で商談相手と会った時には、まずはおたがいにおじぎをして挨拶あいさつし、名刺めいしを交換こうかんして信用を得る。

問八 ——線部F「日本語Ⅱ日本人語仮説」とありますが、これはどういったものですか。解答欄らんに合うように十五字以内で説明しなさい。ただし、解答には次の語句を必ず使いなさい。

・国籍
・言語

日本語は

(十五字以内)

だという考え方。

三 次の文章は、水庭れん『今宵も猫は交信中』の一節です。ただし、設問の都合で本文の一部を変更したところがあります。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

きせきが充実感たっぷりに揺れるケヤキを眺めていると、強い風を肩で切りながらこちらに歩いてくる人の姿が見えた。三十代中盤だろうか、スーツにトレンチコートを羽織った男性だ。

——お客さんだ！

きせきは重たい身体を起こし、トンツと床に降りた。

ドアが開くと、かすかにキンモクセイの香りが舞い込んでいた。

「あの、こんにちは……」

男性がうかがうようにして店内に入ってくる。

きせきはカウターに跳び乗った。

「うおっ、猫」

少し硬くなっていた男性の表情が和らぐ。

お客さんのほとんどは、このようにきせきと目が合うと「お店の方は？」と尋ねるようにニコツと笑いかけてくる。

きせきは軽く口を開けて鳴く真似をした。サイレントニャーというやつだ。

——少々お待ちください。

きせきは背を向け、作業場に向かう。

清時が常時ひとり店に立つようになって以来、きせきの役割はその重要度を上げた。

初見のお客さんは清時の耳のことを知らない。作業中の清時もお客さんが入ってきたことに気づけないことが多い。お客さんはひっそりとした長谷部工場の店内で誰にも応対されないまま待たされると不安になる。貴重なお客さんを逃すわけにはいかないから、まずはこうしてきせきが愛想よく出迎えることにしている。

猫好きのご婦人や紳士はそれだけで一気にご機嫌になり、この店を気に入ってくれたりもする。つい最近気づいたのだが、宝石好きの多くは猫好きで

もあるらしい。憶測^{おくそく}だけれどたぶん当たっている。

お客さんにはひとまずその場で待機してもらい、その間にきせきは作業場に入る。A 普段は立ち入り禁止だが来客時だけは別だ。きせきは研磨^{けんま}作業中の清時の足に自分の身体をすりすりとしこすりつけた。

すると清時は研磨機を止め、店先に顔を向ける。

こちらを覗^{のぞ}いている男性と目が合うと、清時は軽く手を上げてカウンターへ向かった。

こうして来客を知らせるのがきせきの役割だ。商売^{はんじやう}繁盛の招き猫にはなれなくとも、弥生^{やよい}さんを見習って、清時とお客さんをつなぐ大事な看板猫としての役目を全うしているのだった。

清時がカウンターに出ていくと、男性はぺこりと頭を下げた。

大抵^{たいてい}のお客さんは、この待ち時間のうちに『店主は耳が聴^きこえません。チャットと筆談で対応させていただきます』というカウンターの案内札に目を留めている。

なかにはその案内を見ただけで眉^{①まゆ}をひそめて 踵^{②かかと}を返してしまう人もいる。安くない宝石の仕事を任せるのに支障をきたすという判断なのだと思う。たしかに普通^{ふつう}よりははるかに面倒^{めんどう}だし、清時自身もそれには慣れ切っているようだったけれど、きせきとしては「そんなことで」と言いたくなくなったりもする。猫と人間だって言葉は通じなくてもお互い^{たが}助け合っているのだから、人間同士にできないはずがないと思う。

「なるほど、これに向かって話せば文字起こししてくれるんですね」

幸いこの男性は柔軟^{じゆうなん}な人のようで、カウンター上の文字起こし^{たんまつ}端末を見ながら清時とコミュニケーションを取りはじめている。すぐに状況^{じやうきやう}を飲み込んで対応してくれるお客さんは清時にとってもありがたいはずだった。

清時は端末に流れる文字を確認して、男性にうなずいた。ひとつ札を取り出して見せる。

『どういったご依頼^{いらいん}でしょうか？』

はじめのうちは大体決まった流れになるから、清時がいくつかあらかじめ用意しているものだ。弥生^{こみ}さんがいた頃はこういったやりとりはすべて引き受けてくれていたが、彼女^{かのじよ}が亡くなってから清時はこうした環境^{かんげい}整備をせせと行った。最近ようやく慣れてきたようで、きせきは安心しながら二人の様子を見守っていた。

客の男性は内ポケット^{めいし}から名刺を取り出した。頭を下げつつ清時に差し出す。

「B
宝石商の神定と申します」

C
きせきは意外に思った。立派なスーツと革靴を身に着けているから、いわゆる個人のお客さんではなさそうだと睨んではいたけれど、まさか宝石商とは。

清時は業界内では名が知れているようで、これまでも宝石商の人とやりとりをする機会は数多くあった。それでもこれほど若い人は珍しい気がする。宝石商とは宝石やジュエリーの買い付け・販売を行う仕事だ。バイヤーとも呼ばれる。世の中にある宝石の価値を見極め、しかるべき形で市場に流通させる。職人と顧客をつなぐ、業界には欠かせない存在なのだという。

「お察しの通り、まだ若輩者でお恥ずかしい限りですが。約十年間、主にチャントブリを中心にアジア圏で経験を積んできました」

きせきは店先の世界地図を見上げた。チャントブリがタイという国の地名であることは知っていた。タイはわりと日本に近く、それでいて世界でも有数の宝石大国なのだと言生さんがお客さんに話していた覚えがあった。

清時も入力される文字を追いながらうんうんとうなずいて先を促している。

「単刀直入に申しますと、長谷部さんが磨かれた宝石を預けていたきたいのです」

神定は淡々とそう切り出した。

必要以上に媚びる素振りはなく、しかし相手の疑問を先回りして摘み取りながら丁寧に話す。きせきとしては、宝石商にもかかわらずにおいが薄いところに好感をもった。宝石の関係者というのはなぜか香水を好む傾向があり、強いにおいを纏っていることが多いのだ。かすかにキンモクセイの香りがあるが、これはおそらく道中で移ったものだろう。

D
清時は神定を工房に通した。向かい合って椅子に座る。きせきもちろん後を追って、清時の背後に陣取った。

神定の話は要するに、自分の得意なタイを中心に清時の作った宝石を大きく広げたいという売り込みだった。

通称「ハセベカット」と呼ばれる、清時ならではの高度なカット技術がある。宝石の原石ごとに異なる性質や硬度、光の角度などをすべて計算して加工するというものだ。ハセベカットを施された石は、たとえ同じ種類の石であっても、他とは比べ物にならない輝きを放つ。

神定はそのハセベカットで作ったルースを海外向けに展開したいと申し出た。世界でもこのレベルのカットができる職人は希少で、海外市場でうまく広げれば需要がいまの何十倍にも膨れ上がるはず。神定はそう主張した。

清時はペンをとった。

『若いのにずいぶん渋いところに目をつけたな』

清時は歯を見せて笑った。久しぶりに見た、清時の照れた表情だった。かつて弥生さん相手にはよく見せていた顔だ。平淡な口調のなかに神定の紛れもない熱意を読み取ったのだろう。耳が聴こえない分、清時の観察眼は猫のように鋭い。

清時は普段から文字起こし用の端末を使ってはいるものの、清時自身が機械を操作して文字を打ち込むのはあまり得意ではないようで、自分の言葉を伝える際は基本的に筆談にしていた。

きせきはここに来たばかりの頃、どうしても清時が何を話しているのかが知りたくて、ずっとそばで文字でのコミュニケーションを追い続けた。その結果、比較的覚えやすいひらがなやカタカナだけでなく、ある程度の漢字まで読めるようになったのだった。唯一、清時は生前の弥生さんとだけは手話で会話しており、きせきもいくつかは覚えたのだが、いまはもう見るものがなくなっていた。

「規模や生産効率では大手に敵わないかもしれませんが、長谷部工房には唯一無二の技術があります」

自分に任せてもらえれば、長谷部さんの手で生み出された素晴らしい石を世界中のたくさんの人々に届けることができる。神定は胸を張り、しかしすぐにばりばりとこめかみを掻いた。

「いえ、すみません。というのは建前で、本当はただ僕がこの仕事をしたいだけなんです。そのために恥を忍んでここへ来ました。どうか優先的に預けていただけませんか。お願いします」

清時は神定の眼差しを一度しっかりと受け止め、それから身体を起こして腕を組んだ。

『大変ありがたい話だが』清時は再びペンを走らせる。『この工房は少しずつ畳んでいこうと考えてる』

「え」

神定はホワイトボードから視線を上げた。

「やっぱりだ。」

弥生さんの死後、清時の仕事量が激減しているのは事実だった。ただ、ここ最近客足が遠のいているのは、おそらく仕事の依頼自体が減ったわけではないときせきは察していた。案の定、清時が意図的にそうしていたようだ。

きせきが弥生さんと一緒に過ごしたのは最後の一年弱だけだったが、それでも何十年にも亘って清時と弥生さん夫婦が二人三脚でこの工房を営んできたのは明らかだった。

* ルース……「裸石」^{はだかいし}とも呼ばれる。宝石の原石を研磨し、カットした状態の石のこと。

問一 ……線部①②③の本文中での意味として最も適切なものをそれぞれあとのア～エから選んで記号で答えなさい。

① 「眉をひそめて」

- ア 不安を感じて
- イ 怒りをおぼえて
- ウ 驚きをおさえきれず
- エ 理解ができず

② 「踵をかえして」

- ア 倒れこむ
- イ 怒り出す
- ウ 返却する
- エ ひき返す

③ 「案の定」

- ア 予想外に
- イ 予想通り
- ウ 実際のところは
- エ そう思いこんで

問二 —— 線部 A 「普段は立ち入り禁止だが来客時だけは別」とありますが、なぜ「きせき」は普段は立ち入り禁止の作業場に来客時だけ入ることが許されるのか、最も適切なものを次のア～エから一つ選んで記号で答えなさい。

ア 研磨作業の大きな音で来客に気づかない清時に知らせるため。

イ 耳が聴こえない清時に客が来たことを知らせるため。

ウ 店に来た客が予想通りに猫好きだということを知らせるため。

エ 来客時には店先のきせきと、作業場の清時が場所を交替こうたいするため。

問三 —— 線部 B 「宝石商」とはどのような仕事か。具体的に説明しているところを探して二十五字以内でぬき出して答えなさい（句読点や記号も字数に数えます）。

問四 —— 線部 C 「きせきは意外に思った」とありますが、何が意外だったのでしょうか。その理由として最も適切なものを次のア～エから一つ選んで記号で答えなさい。

ア 神定が個人のお客さんなのに、立派なスーツと革靴を身につけていること。

イ 神定が宝石商なのに、立派なスーツと革靴を身につけていること。

ウ これほど若い神定が立派なスーツと革靴を身につけていること。

エ これほど若い神定が宝石商だということ。

問五 — 線部D「これ」とは何のことをさしていますか。本文中より十字以内でぬき出して答えなさい。

問六 — 線部E「ずいぶん渋い^{しぶい}ところ」とありますが、これは神定の主張のどういった部分をさしていると考えられますか。本文中から二十四字でぬき出して答えなさい。

問七 — 線部F「意図的にそうしていたようだ」とありますが、清時が意図的にしていたことは何ですか。また、そのようなことをした理由はなんですか、それぞれ書いて答えなさい。

問八 本文中の**ものの**と同じ意味・用法の「ものの」を使って短文を作りなさい。ただし、解答には主語と述語を必ず使いなさい。また、本文の語句や文を利用しただけの解答は不正解とします。

